

Euclid 空間の直積位相についての補足

幾何学 AI/幾何学 I (担当: 新國)

2013 年 7 月 3 日 (水)

以下で, 講義における § 4.2 の例 4 で時間の都合上述しなかつた,

2次元 Euclid 空間 \mathbb{R}^2 において, $\mathbb{R} \times \mathbb{R}$ としての直積位相 $\tilde{\mathcal{O}}$ と, 標準的な位相 $\mathcal{O}(\mathbb{R}^2)$ が一致する

ことの証明を述べる.

まず, 直積位相 $\tilde{\mathcal{O}}$ による位相空間 $(\mathbb{R}^2, \tilde{\mathcal{O}})$ において,

$$\mathcal{B} = \{O_1 \times O_2 \mid O_1, O_2 \in \mathcal{O}(\mathbb{R})\}$$

は $(\mathbb{R}^2, \tilde{\mathcal{O}})$ の基底である. そこで \mathbb{R} の开区間全体の集合は $\mathcal{O}(\mathbb{R})$ の基底であったから (§ 2.4 の例 4 で $n = 1$ の場合),

$$O_1 = \bigcup_{\lambda \in \Lambda} (a_\lambda, b_\lambda), \quad O_2 = \bigcup_{\mu \in M} (a_\mu, b_\mu)$$

と表せる. このとき

$$\begin{aligned} O_1 \times O_2 &= \left(\bigcup_{\lambda \in \Lambda} (a_\lambda, b_\lambda) \right) \times \left(\bigcup_{\mu \in M} (a_\mu, b_\mu) \right) \\ &= \bigcup_{(\lambda, \mu) \in \Lambda \times M} ((a_\lambda, b_\lambda) \times (a_\mu, b_\mu)) \end{aligned}$$

であるから, 故に \mathbb{R} の开区間の直積全体の集合

$$\tilde{\mathcal{B}} = \{(a_1, b_1) \times (a_2, b_2) \mid a_i, b_i \in \mathbb{R}, a_i < b_i\} \quad (i)$$

もまた $(\mathbb{R}^2, \tilde{\mathcal{O}})$ の基底である. 即ち, 標準的な位相による位相空間 $(\mathbb{R}^2, \mathcal{O}(\mathbb{R}^2))$ が, 平面 \mathbb{R}^2 に対し “開円板” 全体の集合を基底とする位相を入れた空間であったのに対し, 直積空間 $(\mathbb{R}^2, \tilde{\mathcal{O}})$ は, 平面 \mathbb{R}^2 に対し “開長方形” 全体の集合を基底とする位相を入れた空間である.

次に, 改めて標準的な位相 $\mathcal{O}(\mathbb{R}^2)$ による位相空間 $(\mathbb{R}^2, \mathcal{O}(\mathbb{R}^2))$ を考える. まず, 講義の § 2.4 において, 以下の定理を証明したことを思い出す:

定理 2.4.4. 位相空間 (X, \mathcal{O}) 及び \mathcal{O} の部分集合 B に対し, B が (X, \mathcal{O}) の基底であることと, 任意の $O \in \mathcal{O}$ に対し,

$$\forall x \in O, \exists W \in \mathcal{B}, \text{ s.t. } x \in W \text{ かつ } W \subset O$$

が成り立つことは互いに必要十分条件である.

この定理 2.4.4. を用いて, (i) の集合族 $\tilde{\mathcal{B}}$ が, 実は $(\mathbb{R}^2, \mathcal{O}(\mathbb{R}^2))$ の基底でもあることを以下で示そう. いま, $(\mathbb{R}^2, \mathcal{O}(\mathbb{R}^2))$ の任意の開集合 $O \in \mathcal{O}(\mathbb{R}^2)$ において,

$$\forall \mathbf{a} = (a_1, a_2) \in O, \exists \varepsilon > 0, \text{ s.t. } B(\mathbf{a}; \varepsilon) \subset O \quad (\text{ii})$$

が成り立つ. 更にここで $\varepsilon' = \varepsilon/\sqrt{2}$ とし, $\tilde{\mathcal{B}}$ に属する \mathbb{R}^2 の部分集合

$$W = (a_1 - \varepsilon', a_1 + \varepsilon') \times (a_2 - \varepsilon', a_2 + \varepsilon')$$

を考える. これは $(\mathbb{R}^2, \mathcal{O}(\mathbb{R}^2))$ の開集合でもあることに注意しよう¹. このとき,

$$\begin{aligned} \mathbf{x} = (x_1, x_2) \in W &\iff a_1 - \varepsilon' < x_1 < a_1 + \varepsilon' \text{ かつ } a_2 - \varepsilon' < x_2 < a_2 + \varepsilon' \\ &\iff |x_1 - a_1| < \varepsilon' \text{ かつ } |x_2 - a_2| < \varepsilon' \\ &\implies (x_1 - a_1)^2 + (x_2 - a_2)^2 < 2\varepsilon'^2 = \varepsilon^2 \\ &\iff \mathbf{x} = (x_1, x_2) \in B(\mathbf{a}; \varepsilon) \end{aligned}$$

より, $W \subset B(\mathbf{a}; \varepsilon)$ である (幾何的な意味は図 1 を見よ). 故に (ii) と合わせて

$$\mathbf{a} \in W \text{ かつ } W \subset O$$

が成り立つ. 従って定理 2.4.4 により, $\tilde{\mathcal{B}}$ は $(\mathbb{R}^2, \mathcal{O}(\mathbb{R}^2))$ の基底である.

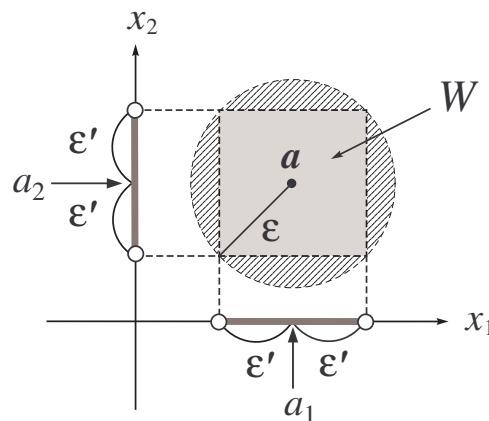


図 1: $W = (a_1 - \varepsilon', a_1 + \varepsilon') \times (a_2 - \varepsilon', a_2 + \varepsilon') \subset B(\mathbf{a}; \varepsilon)$

¹実際, 任意の $b \in W$ に対し, b を中心とする \mathbb{R}^2 の開球体で W に含まれるものが存在する. 詳細は各自確かめよ.

以上により,

$$O \in \tilde{\mathcal{O}} \iff O = \bigcup_{\lambda \in \Lambda} W_\lambda \quad (W_\lambda \in \tilde{\mathcal{B}}) \iff O \in \mathcal{O}(\mathbb{R}^2)$$

となるので,

$$\tilde{\mathcal{O}} = \mathcal{O}(\mathbb{R}^2)$$

が得られる. 即ち, 直積位相 $\tilde{\mathcal{O}}$ による位相空間 $(\mathbb{R}^2, \tilde{\mathcal{O}})$ と, 標準的な位相 $\mathcal{O}(\mathbb{R}^2)$ による位相空間 $(\mathbb{R}^2, \mathcal{O}(\mathbb{R}^2))$ は全く同じものである. \square

より一般に n 次元 Euclid 空間 \mathbb{R}^n については, 次の定理が成り立つ.

定理. n 次元 Euclid 空間 \mathbb{R}^n において, \mathbb{R} の n 個の直積 $\mathbb{R} \times \mathbb{R} \times \cdots \times \mathbb{R}$ としての直積位相 $\tilde{\mathcal{O}}$ と, 標準的な位相 $\mathcal{O}(\mathbb{R}^n)$ は一致する. 即ち, 直積位相 $\tilde{\mathcal{O}}$ による位相空間 $(\mathbb{R}^n, \tilde{\mathcal{O}})$ と, 標準的な位相 $\mathcal{O}(\mathbb{R}^n)$ による位相空間 $(\mathbb{R}^n, \mathcal{O}(\mathbb{R}^n))$ は全く同じものである. \square

実際, \mathbb{R} の开区間の n 個の直積全体の集合

$$\tilde{\mathcal{B}} = \{(a_1, b_1) \times (a_2, b_2) \times \cdots \times (a_n, b_n) \mid a_i, b_i \in \mathbb{R}, a_i < b_i\}$$

が, $(\mathbb{R}^n, \tilde{\mathcal{O}})$ 及び $(\mathbb{R}^n, \mathcal{O}(\mathbb{R}^n))$ の基底であることを示せば良い. 詳細は演習問題とする.